

〔翻 訳〕

『スペクテイター』（2）

——第6号から第15号——

門 田 俊 夫

第6号 1711年3月7日（水曜日）

【スティール】

老齡がとても崇敬されている当時は
お年寄りが入って来たとき、若者が席を離れないのは
不敬な行いであった。（ユヴェリナス）¹⁾

この世で思慮分別の濫用ほど大きな悪弊はないと、私は思います。なお、これほどよく見かける悪徳は他にはありません。これは男女を問わず、また、あらゆる階級の人たちの間にも広く行き渡っています。そして、ほとんどの人が誠実と高潔よりも機知と分別に対する評判を気にかけています。しかし、このように不幸にして、誠実であるより賢明であり、善良であるより才気縦横であろうとすることは、人生におけるほとんどすべての悪習の源なのです。こういった間違った考えは才人たちの見捨てられた著述と他の人たちによる厄介な模倣にその責任があります。

このために、サー・ロジャーは昨夜、立派な才能の持主以外は誰も絞首刑を受けるに値しないと思うと言っていました。そういった人たちの考えは自分たちの気遣うあらゆる出来事に対して非常にきめが細かいので、自分たち自身の心が与える鋭い忠告に背くことに対して、また、緩慢な理解力の持主と同様に、悪徳や愚行に衝撃を受けないそんな態度で、精神の鋭い切れ味を鈍らせることに対しては通常の汚名や処罰以上のものにさらされるべきなのです。優れた才能を持ちながらその一方で邪悪な人ほど際立った怪物はいません。この怪物は半身が死に体のまま麻痺状態で生きているのです。彼はおそらく贅沢、富、野望を満足させている間に、善意、友情、無垢といった感覚を喪失したのでしょう。リンカーンズ・インの右足が不自由な乞食スケアクロウは一日中物乞いをして、暖かい食事と夜の売春婦を手に入れています。この乞食でさえこういった分別のある人と比べると、その半分も卑劣ではありません。この乞食は感覚以外のものには関心を寄せません。移動するよりその場にじっとしている方が心地よいと彼は思っています。暖かい火があり、売春婦がいますが、彼は自分が鞭打たれる価値があるとは思いません。サー・ロジャー

1) ユヴェナリス『諷刺』13の54～55。ユヴェナリス（c.60-c.140）はローマの諷刺詩人でジョンソン、スウィフトらに影響を及ぼす。

に言わせると、必需品と情熱の備えのうちで自らの満足感と楽しみを終わらせる人は誰でもスケアクロウと同じく、哀れなならず者なのです。しかし、引き続きサー・ロジャーは公私における美德の喪失に対しては、私たちは確かに有能な人たちに恩義があるのだと述べました。それは何事であれ彼らに関わりがあり、それも自信有り気に処理されるのです。しかし、腐敗した時代には、人間性と理性に従って振舞うほど気まぐれな私にとっては、利己的な人は非常に目立つ境遇にあって仰々しく飾り立て、社会から奪い取るものに比して、なおさら侮蔑的ではありますが、前述の人と同じ条件で登場します。そして、自分に値しないものを享受するのです。それ故、私は人間全体が共に行動することを習わしとしています。つまり、重要な行動はすべて公共の利益を見通さなくてはならないのです。そしてまた、私たちの平凡な行動は全般的な傾向として、理性、宗教、立派な教養の指図に合致させるべきなのです。これがない人は、私がこれまでにそれとなく言って来ましたように、歩く代わりに飛び跳ねているのです。こういった人は完全かつ正しく行動しているとは言えないのです。

誠実な騎士がどのように踏み出せばいいか戸惑っているとき、私は注意深く²⁾見つめていました。私が思いますに、彼はそのことで少し考えを集中しました。彼が言うには、自分が目指すことは思慮分別に磨きをかけ、風習を軽視することだということです。そして彼はそういった考えを持っているということでした。理性が情熱を支配すべきなのですが、ご存知の通り実際にはそうはならず、理性はしばしば情熱に媚びへつらっているのです。思うに、奇妙なことなのですが、賢明な人が必ずしも善良な人ではないのです。この墮落は単に特定の人の資質に止まらず、時にはすべての人の資質となるのです。そして調べてみますと、最も礼儀正しい人々が最も徳がないかも知れません。このことは機知と学識をその適用を考慮しないで、それ自体を美点として受け入れるという愚行に起因するのかも知れません。このように、規範としては私たちが行うことよりはむしろ私たちがどのように行うかということを注視することが肝要なのです。しかし、偽りの美人は誠実な心と真の分別を持った人の手には渡らないでしょう。サー・リチャード・ブラックモアは良識と美德を持って「豊富な素晴らしい機知の才能を、悪徳と愚行に耽ける人たちの機嫌取りと彼らを喜ばすために費やすのは、大きな恥辱であり不面目なことなのです。人間には機知と天使のような能力が備わっているにも拘わらず、最大の敵はあらゆる被造物の中で最も憎むべき存在であるということだ³⁾」と言います。このすぐ後で、彼はさらに「ミューズの女神たちを強奪者の手から救い出し、甘美で上品な館に復歸させ、その威厳に相応しい仕事に就かせるために」詩作に取り掛かったのだと、とても高潔に言葉を続けます。これは確かに人前に出るすべての人々の目的であるべきです。このことを基礎にして進まない人は誰でも研究で上手く行くのと同じくらい急速に国を傷つけることになるのです。謙虚さ⁴⁾が男女どちらかの大切な装飾品

2) intently の意。intently がこの意味で用いられたのはOED最後の例。

3) 1695年の『アーサー王子』の序文。

4) 『タトラー』紙84号では「謙虚さは女性の大きな美德である」と説いている。

となり、補完しなくなったら、社会は誤った基盤に乗っかかり、私たちは今後何が真に適切なものであり、何が装飾的なものであるかの判断を導くその規範を失ってしまうでしょう。人間性と理性があるものを指摘し、情熱と気分がそれとは異なるものを指摘することになります。後者ふたつの指図に従うことは終わりのない入り組んだ道に通じています。もう一方の道を辿れば私たちの行く手は快適であり、目指すものは容易に手に入ります。

私はイングランドが現在、世界の他の諸国と同様に、洗練されているということに疑いを差し挟みはしません。しかし、少し頭を働かせる人なら誰でも、陽気にかつ流行に乗り遅れないでおこうとすることが良識と宗教心をほぼ食い尽くすことになっているのだということは容易に分かります。公正や敬虔という慣行にとって正しくかつ適切なものを確立しようと努力するときに、様式や武勇を用いることほど十分根拠のあることが他に何かあるでしょうか。しかもなお、私たちがそれとは全く正反対の方向に走ることほど一般的になっていることが他に何かあるでしょうか。こういったことはすべて、それなりの口実が設けられているのです。

人間性それ自体が私たちを鼓舞してそう考えさせること以外に、賞賛に足るあるいは相応しいものがあってはならないのです。目上の人に対する尊敬の念は、思うに、本能にその基盤が置かれているのです。だが、年齢ほど馬鹿げたことはないのです。唐突ですが、私はちょっとしたお話⁵⁾を紹介するために、何にもましてひどいこの悪徳へと話を移します。最も上品な世代が最も不道徳になる危険性があるというとてもない実例があるのです。

「たまたまアテネで国を祝してある芝居が上演されたとき、ある老齢の紳士がその年齢と地位に相応しい観客席に、遅刻してやって来たのです。その老紳士が狼狽している様子を目にした若い紳士たちが、自分たちの座って居る所に来れば席を融通すると彼に合図を送りました。その善良な老紳士はそこで人込みをかき分けてそちらに進みました。しかし、彼が招かれた席の所へ行くと、物笑いの種が傍らに潜み、彼を全観客のもとにさらすことになりました。彼は当惑して立ちすくんでいました。アテネ人たちの席の間で大騒ぎになりました。ところでこの場合、外国人には特別に別の席が用意されていました。この善良な人がこそこそとラケダイモン人の席に行ったとき、上品というよりはむしろ徳高い人たち全員が立ち上がり、彼をこの上ない敬意を込めて迎え入れたのです。スパルタ人の美徳に対する感覚と自分たち自身の退歩に突然心を動かされたアテネ人たちは割れるような喝采を贈りました。そしてその老紳士は「アテネ人は何が良い事かは分かっていますが、ラケダイモン人はそれを実践に移すのです」と叫びました。

5) プルタークおよびキケロを念頭に置いている。

第7号 1711年3月8日(木曜日)

【アディソン】

幻や呪文を嫌悪し、魔女や亡霊や怪物を笑うことができるか。(ホラティウス)¹⁾

昨日、私は昔馴染みの人と一緒に食事をしたとき、不幸にも彼の家族がとても意気消沈していることが分かりました。彼にその理由を尋ねますと、彼の細君が昨夜奇妙な夢を見て、それは彼ら自身ないしは子供たちの身の上に何か不幸がある前兆だと恐れているのだと答えるのでした。彼女が部屋に入って来るとき、私は彼女の顔に根深い憂鬱の表情が浮かんでいるのに気づきました。それはもし私が事のあらましについて聞いていなかったら戸惑ってしまうほど暗い表情でした。私たちが腰掛けるや否や、彼女はちらっと私の顔を見た後、夫の方を振り向いて、「あなた、今度はあなたが昨夜蠟燭の中に浮かんでいた見知らぬ人²⁾に出会うかも知れません」と言います。このすぐ後で、彼らが家の事を話し始めたとき、テーブルの端にいる幼い男の子が木曜日に手習い³⁾に行く事になっていると彼女に言いました。すると、彼女は「木曜日ですって、駄目です。出来るものなら聖嬰兒日⁴⁾に始めてはいけません。手習いの先生に金曜日はすぐ来ますと言いなさい」と言うのです。私は彼女の奇異な妄想について独りで思案し、毎週一日をふいにする決まりを誰かがこしらえたのかなといぶかしく思っていました。私がこんなことを考えている最中に、彼女は私にナイフの先に塩を少し載せて渡して欲しいと言いました。私はとてもうろたえ慌てたために、途中で塩を落としてしまいました。それを見た彼女は直ちにびくっとし、自分の方に向かって落ちて来たと言いました。この時私は非常に呆気に取られました。そして、テーブルの人たち全員の懸念に気づいて、少々困惑しながら、自分がこの家族に禍をもたらした張本人なのだという考えを持つに至りました。しかしながら、この夫人はしばらくすると気を取り直して、夫に向かってため息交じりに「あなた、不幸は重なるものですね」と言いました。私が見るところ、私の友人はテーブルでは補佐的な役割を演じているに過ぎませんでした。そして、彼は思慮分別の人というよりは善良な人ですので、自分は配偶者の情熱と気性に同調する義務があると考えているのです。「あなた、覚えていらっしゃるでしょう。我が家の軽率なお手伝いがテーブルに塩をこぼした日の午後、鳩小屋が倒れたのを」と彼女は言うのです。「うん、そしてその後で来た郵便でアルマンザの戦い⁵⁾のことが知らされたのだ」と彼が口をききました。読者は私がこの

1) ホラティウス『書簡詩』2. 2.208-9.

2) 「カップに浮かぶ茶の葉」、「蠟燭の芯の突起物」、「火格子の横木につく煤」、「自分の方に飛んで来る蛾」などは、俗に予期せぬ訪問客の到来を予告するものと考えられている。

3) カーシブ(筆写体)。古書体の一種で続け書きの草書体に相当する。

4) 罪なき嬰兒殉教の日。ヘロデ王の命令でベツレヘム中の幼児が殺された記念日(12月28日)で1年で最も縁起の悪いと考えられていた。

5) ゴールウェイ卿は1707年4月25日にこの地でスペインに敗北を喫した。この知らせは5月31日にイ

不始末をした後、どんな有り様であったかお分かりでしょう。私はいつものように黙ったまま出来るだけ早く食事を済ませました。そこでまた私がとても困惑したことには、私がナイフとフォークをお皿の上に十字に置くのを見て、夫人がどうかナイフとフォークはそう置かないで、並べて置いて欲しいと言うのです。私がどんな理不尽なことをしたかは分かりませんでしたが、これには何か因習的な迷信があるのだと思いました。そこで、当家の夫人の言う通りに、ナイフとフォークを並べて置きました。何故このように置くのかは私には分からないのですが、私はその後ずっとそのように置いています。

ある人が自分に対して嫌悪の情を抱いているかどうかは簡単に分かることです。私自身に関しては、この夫人の顔に出ている痛ましい表情から、彼女が私のことをとても変な人間だと見なしているのがすぐに分かりました。そこで、私は食事が済むと直ちに、暇乞いをして我が家に引き返しました。帰宅して私はこういった人間の迷信深い愚行⁶⁾に付きまとう悪弊について深く考え込みました。こういった悪弊はどのようにして運命に逆らって私たちを苦しめ、さらには悲しませるのか。人生の本来の不幸だけでは不十分でもあるかのように、私たちは最も無頓着な状況までも逆境に転じてしまい、真の悪弊から受けるのと同じくらいの苦しみを些細な出来事から味わうことになるのです。流れ星が夜の憩いを台無しにするということを私は知っています。そして、恋をしている人が流れ星を見て、浮かれた考えをもぎ取られ蒼ざめ、食欲をなくすのを見たことがあります。夜中のメンフクロウは強盗の一団よりも一家の人たちを恐怖に陥れます。それだけにとどまらず、ライオンの唸り声よりコオロギの方が恐怖を引き起こすのです。前兆と徴候で一杯になった心にはいかに取るに足らないことも恐ろしく見えるものです。錆びた釘あるいは曲がったピンが増長して何かの兆しとなるのです。

私はかつてとても騒々しく陽気な男女混合の集まりに同席したことがあります。その時、突然ある老婦人が不幸にして全員で十三名だと言いました。この一言はその場に居合わせた数名の人たちに変な恐怖を引き起こしました。そのため、ご婦人方のうち一人か二人が部屋を出て行こうとしました。でも私の友人のひとりが女性の一人はお腹に子供がいることに気づいて、ここには十四名いるのです、それも一同の中で一人が死ぬという兆しなんかではなく、明らかに一人が生まれる前兆となっているのだと断言しました。もし私の友人が縁起担ぎを破る方便を見出さなかったら、その場のご婦人方の半数に止まらない人たちがその晩には床に臥したのではないかと私は思います。

憂鬱症に苦しんでいる年取った未婚の女性は、この種の騒動を無数に彼女の友人や近所の人たちの間に撒き散らします。私はある身分の高い家の未婚の女性を知っています。彼女はこういっ

ギリスに伝えられた。アルマンザは注目を浴びており、上院では6月6日にゴールウェイ伯爵を喚問し、事情を聞いた。その後、激しい論争が長期に渡って繰り広げられた。

6) 「塩売りがころぶ」「野兎が前を横切る」「ワタリガラスの鳴き声」「犬の遠吠え」「フクロウの鳴き声」「ベッドを虫が這う」「死番虫と勘違いすること」などなどを縁起の悪いことと信じ込むこと。

た古風な巫女の一人で一年中予言、予見をしています。彼女は常に幻を目にし、死番虫のカチカチという音を聞いているのです。そして、彼女は先日歯痛で横になっているとき、厩舎で吠える番犬の声に正気を失わんばかりに脅えました。そのような突飛な気性は、自らを数限りない人々をお門違いの恐怖だけでなく、人生における余分の務めへと引き込むのです。こういった気性は人の心にとってごく自然な恐怖と無知がもとで生じるのです。私たちが死を想う恐怖、あるいは実際に将来の何らかの不幸を恐れる気持ち、そして死の訪れの不確かさに対する恐怖は、憂うつな心を数え切れない不安と疑念で塞ぐのです。その結果、塞ぎ込んだ心は根拠のない不可解なものや予言を遵守することになるのです。何故なら、人生の不幸を冷静な理性で最小にするのが賢明な人の主要な関心事であり、不幸を迷信的な考えで増幅させるのは愚者のやることだからです。

私自身に関しましては、私の身に降りかかるあらゆることを正確に知らせてくれるのですが、もし私にこの占いの素養が授けられていたとしたら随分悩むことでしょう。私なら実際に身に訪れない限り、何か幸福の気配を待つこともないし、何か不幸の重圧も感じないでしょう。

こういった心に浮かぶ暗澹たる前兆や恐怖から身を守る方法を私はひとつしか知りません。その方法とは、出来事を定め将来を支配する神と親しく交わり、かつ神を守ることを保証することです。神は私がすでにこれまで歩んで来た一部だけでなく、これから来世の深みに入っていくその部分に至るまで、私の存在のすべての緒を一目で見分けます。私は横になって眠りにつくときは身を神の保護に託し、目覚めているときには神の指図に任せます。私を脅かす不幸に見舞われたときには神に救いを求め、私に有利になるようにその不幸を逸らし押し返してくれるよう祈ることでしょう。私が死ぬことになる時期および方法は私には分かっていませんが、私はそのことは全く案じていません。何故なら、神がその双方はご存知であり、きっと私を楽しにし、支えて下さると確信しているからです。

第8号 1711年3月9日（金曜日）

【アディソン】

ヴィーナスが彼らを霧で優しく覆い

雲を巻き込んでいますので

彼らは人目に付かないで歩みます。(ウェルギリウス)¹⁾

私はここで二通の手紙を世間のみなさんにお伝えしたいと思います。その手紙は読者のみなさんにこの上なく素晴らしい気晴らしをもたらしてくれるものと私は信じています。そこで、ここではこれ以上何も付け加えず早速手紙をご紹介します。

1) ウェルギリウス『アイネーイス』第1巻 411-13.

スペクテイター新聞御中

拝啓

私は風習矯正協会²⁾の理事の一員です。従いまして、私は貴紙にとりまして相応しい人物だと考えております。私はグレートブリテンにおける現在の信仰事情を綿密に考察致しており、貴紙に全国すべての市場の立つ町における支配的な悪徳についてお知らせすることが出来ます。また、すべての都市、自治都市、そして地方自治体における美德の進展状況をお知らせすることが可能です。そしてまた、私自身の家庭内は言うまでもなく、ベリックあるいはエクセターで行われています悪習を承知しております。一言で言いますと、全国隈なく私の通信員がいるのです。彼らはそれぞれの地方あるいは地区で気づいたあらゆる変わった出来事につきまして、どんな些細な事までも逐一きちんと記事を送って来るのです。

私は全国のさまざまな地方や区域だけでなく、このロンドンの特定の地区や一帯の事情にも通じています。あらゆる教区の不信心さの度合いを描写することが出来ます。そして、どの通りが猥褻で、どんな賭博が行われているか、そしてどの場所では飲酒が猥褻と賭博よりも勝っているかをお教え出来ます。貧しい人たちのための負担金を調達する場合には、下品な悪態をつく人が住んでいる横丁や路地を知っています。ブライドウェル救護院³⁾を励まし、絞首索製造の改善をする場合には、売春婦の出没する場所や盛り場を良く知っています。

以上簡単に私自身のことを説明しましたので、この投書の目的はみなさんにある異例の集まりについての情報を提供することにあるとお知らせしておかなくてはなりません。その異例の集まりは、とりわけその構成メンバーが世間の非難にとって無視出来ない犯罪人なのですから、当然みなさんの目に付くと思います。その集まりとは、つまり「真夜中の仮面」⁴⁾のことなのです。この集まりは最近ロンドンのとてもよく人目に付く場所で度々開催されているのです。そして、人数を増やし、趣向を凝らして今後も引き続き開かれると言う噂です。この無法な集まりを構成する人たちは全員仮面を付けていますので、上流婦人をブライドウェル送りにしたり、グレートブリテンの貴族をシティー裁判所付属の監獄⁵⁾送りにするようなことになってはいけませんので、私たちは巡査に守られている訳ですが、彼らが私たちの仲間を追い出してしまうのではないかと、

2) ウィリアム、メアリ時代初期には、「冒瀆と放蕩をやめさせる」との目的で、この種の協会がいくつか設立され、年報を発行していた。

3) 1553年に創設されたこの建物は衰弱した職人を収容するための慈善施設つまり収容所であった。また、職に就かない浮浪者、ずばらで手におえない召使、夜盗や売春婦等を更生させるための感化院でもあった。フリート・ストリート¹⁾の東端の聖ブライド教会の近くに位置していた。ネッド・ウォードの『ロンドン・スパイ』第4部に大麻を克服しようとしている男女双方の入居者についての記述がある。

4) ランベス・ウェルズ、スプリング・ガーデンなどで催される仮面舞踏会はいろいろスキャンダルの原因となった。ポープの『髪の毛盗み』(1712年)の中で、ベリンダは宮廷風の舞踏会と夜中の仮面舞踏会には注意するよう警告される。

5) 債務者や酔っ払いたちが公判を受けるまで収容された監獄。

私は危惧しています。彼らを当局から護る以上の二つの理由から、彼らがみなさんにとって不快な存在となっているのです。彼らの変装とその数によって、誰も自分たちが人々から非難されていると思わなくなっているのです。

私の聞いていますことが正確な情報だとしますと、この新しい社交界によって遵守されている常習は驚くことに姦婦を助長するよう工夫されています。ご婦人方は自らあるいは友人の紹介を受けてやって来ます。彼女たちは初めてやって来たときから、話し掛けて来る人の会話に身を預けざるを得なくなります。二人で引きこもり、気が向けば、同意の上で顔を見せ合うことの出来る部屋がいくつか用意されています。その部屋では囁き、手を握り合い、うなずき、抱擁は自由自在なのです。要するに、この煽情的な集まり自体の目的は最終的に逢引きと密通に落ち着きそうです。どうか貴紙が公の助言と説諭によって、このように多数の男女が入り乱れて密会するのを防ぐ効果的な方策をとられんことを希望します。

敬具

ティー・ビー

以上の手紙を読み終えましてしばらくして、私は同じテーマの手紙をもう一通受け取りました。その日付と文体から見まして、この手紙はテンプル法学院の若い法律家のものと考えられます。

拝啓

ある人物が何か悪徳あるいは愚行を犯した場合には、その人に出来る最善の贖いは他人が同じ過ちを犯さないように警告を発することだと、私は考えます。このために、私はこの前の2月のある火曜日の仮面舞踏会に出掛けたことをお知らせしなくてはなりません。初めて行ったとき、私は6人の女性クエーカー会員に迫られました。彼女たちは進んで私を弟として選んでいるように思えました。しかし、もっとよく調べてみますと、彼女たちはクエーカーの衣服で変装した男たらしの一团であることが分かりました。その直後、私が思いますに、上流階級の婦人からダンスの誘いを受けました。というのは、彼女はとても背が高く優美な身のこなしをしていましたから。メニューエットが終わるとすぐに、私たちは互いに仮面越しに色目をつかいました。私はウォラーの詩をよく読んでいましたので、彼のヴァンダイクの詩から次の四行を彼女に暗唱して聞かせました。

思慮にかける恋人には分からない

その眼差しがとても自分を傷つけるということが。

でも、あなたの技巧に困惑しながら

自分の心を射止める女の名を尋ねる。⁶⁾

6) エドマンド・ウォラー (1606-87) 『ヴァンダイクに寄せて』 5～8行。

私はこの詩句を私が愛情を勝ち取ったのだと考える何らかの根拠があるかのごとく、やるせなく朗唱しました。彼女は私の顔と口が似ていなければいいのにと私に言いました。私は彼女の時計を見て、たまたま時計の裏側に宝冠図形があるのに気づきました。私は愛人への想いに我を忘れていましたので、考えられるありとあらゆる仕草、言葉を投掛けながら部屋から部屋へと彼女を連れまわりました。そしてついに、彼女から翌日、小姓あるいは召使も付けず、馬車また供回りの者も従えず、内密に会うというとても幸せな結論を引き出したのです。私は有頂天になって、小躍りしました。しかし、この最高の夢に包まれた生活は三日と持ちませんでした。洗濯女に忠実であり続けておいた方が良かったと考える理由が見付かったのです。その後、私は全くの偶然から、この立派な婦人がコヴェントガーデンの近くに住んでおり、伯爵夫人として身を委ねた男は私が初めてではないのだという噂を耳にしたのです。

以上私がクラウドのような女とユーノーのような女性⁷⁾を間違えた様子がお分かり頂けると思います。どうか私のような愚かな伊達男たちのために、この私の体験をご参考にして頂けましたら喜ばしいものとする次第です。

敬具

ビー・エル

次の仮面舞踏会には、私自身が私がカイロで着ていたのと同じ衣服を着て行ってみたいと考えています。それまではこの深夜の娯楽に対します私の判断は保留させて頂きます。⁸⁾

第9号 1711年3月10日(土曜日)

【アディソン】

虎と虎、熊と熊、共に結託して

攻守同盟を組むのが分かる。(ユヴェリナス)¹⁾

人間は社会的な動物とされています。²⁾ その一例として、私たちはあらゆる機会と口実を設けて一般にクラブ³⁾ という名で知られているあの夜の集まりを持つということを挙げる事が出

7) ユーピテルは客イクシーオンがユーノーに恋しているのが分かったとき、女神の女官のひとりネペレーつまりクラウドに命じ、女神ユーノーの装いをさせ、イクシーオンのところへやらせた。すると、イクシーオンは彼女を女神自身と思って、大いに喜んだ。

8) 『タトラ』215号において、露な胸元を嘆くリンネル商人の嘆願に対して、ビッカースタフ氏は似たような返答をしている：「この嘆願にお答えする前に、自分の眼で困り者たちの様子を調べてみたいと思います。」

1) ユヴェナリス『諷刺』15.163-4.

2) アリストテレス『政治学』1252B.

来ます。一組の人間が、どんな些細なことであっても、何らかの点で同意見だと分かると、彼らは一種の友愛会のようなものを作って、非常に似通った理由から週に1, 2回会合を持ちます。私はある有名な市場町を知っています。この町に、「肥満クラブ」⁴⁾があり、みなさん方がご想像の通り、このクラブの人たちは互いに活発に機知を競うためにではなく、お互いの顔を立てるために集うのです。クラブの開かれる部屋は最大級の部屋で、入口は二つあり、一つは中くらいの大きさのドアで、もう一つは一對の折り戸になっていました。この肥満クラブの会員候補者が前者のドアから入ることが出来たら、その人は無資格者と見なされました。途中で動けなくなり、どうしてもそのドアから入れなかったら、その人を入れるために直ちに折り戸が開け放たれます。そして、その人は兄弟として迎えられます。このクラブはメンバーがほんの15名に過ぎませんが、体重は3トンを超すと聞いたことがあります。

このクラブとは対照的に、痩せっぽちの人たちで組織されたもう一つ別のクラブが出現しました。この人たちは非常に痩せており、負けん気が強いので、太った同胞たちの考えの裏をかくために、ありとあらゆることを行いました。彼らは太った同胞たちのことを危険な道義の持主だと申し立てました。そしてついに、彼らは次第に人々から認められなくなり、その結果治安判事の職を解かれることになりました。こういった徒党は数年間で自治体をずたずたに引き裂きました。そして、彼らはやっと次のような和解に到達しました。つまり、町の執行吏は毎年双方のクラブから選出されることになったのです。これによって主要な治安判事は今日、まるでさねはぎのように、一方が肥満で、もう一方が痩せっぽちの二人になっています。

王様たちのクラブというか徒党のことは誰でも耳にしたことがあります。この堂々とした同盟はチャールズ二世の復古後ほどなくして結ばれました。そしてこの同盟にはキングという名字で一致するならあらゆる階級、職業の人が入会を認められました。当然のことですが、これは自分が共和主義にも反君主的な考えにも、全く汚されていないということを宣言することを意味しました。

洗礼名はまた、しばしば栄誉の印として用いられ、クラブ創設のきっかけとなりました。かつてジョージという標識のもとに聖ジョージの日に集い、ジョージの前で誓いを立てたジョージと

3) 虚実あい半ばしているがアディソンのクラブに関する記述は、18世紀の社会生活に大きな役割を果たしたクラブについての同時代人の重要な解説のひとつである。その他多くのクラブについては、後日の紙面でも扱われている。ネッド・ウォードの『クラブ裏面史』(1709)は後に『サテュロスのクラブ考』へと展開されたが、これもまた少々気品に欠けるとはいえ、同じく生き生きとした記述となっている。1711年にはジェイムズ・パックルによって『クラブ、父と息子の対話』という奇妙な小著が出版され、オースティン・ドブソンの『18世紀の小品』の中でその歴史が述べられている。ジョン・ティムズの『ロンドンのクラブとクラブ生活』(1872)も興味深い情報が盛り込まれている。最近のものとしては、ロバート・アレンの『アン女王時代のロンドンのクラブ』(1933)がある。

4) このクラブは、「痩せぎすクラブ」同様、個人的および政治的な諷刺の手段としてアン女王時代の文学界でとても人気のあった架空のクラブの部類にあたる。

いう洗礼名は今でもみんなの記憶に新しいものです。

現在、ロンドンの数カ所に、いわゆるストリート・クラブというものがあります。このクラブではそのストリートの主だった住民が毎晩集って話をするのです。私がオーモンド・ストリート⁵⁾で下宿を探しているとき、その地区を薦める家主が、ここには今とても立派なクラブがありますよ、と私に言ったのを覚えています。さらにその家主と話をしていると、彼はまた一年前からここに住んでいる二、三の騒々しい地方の郷土が家賃をかなり下落させたのだと語りました。そこで、このクラブはこれから先、同様の迷惑がかからないように、空き家はすべて社交的で話し好きな居住者が見付かるまでは自分たちの手で管理することにしました。

私が以前末席を汚したことのある「退屈クラブ」⁶⁾は穏やかな性格で、とても誠実な紳士の集まりでした。このクラブの人たちはいつもパイプを燻らせ、夜中まで黙って共に座っているのです。「無言クラブ」⁷⁾は、聞くところによりますと、同種のお喋りを最大の敵としているようです。

以上二つの罪のないクラブのことをお話ししましたので、チャールズ二世の治世に設立されたとても罪深いクラブについて触れないわけにはいきません。それは「決闘者のクラブ」⁸⁾なのです。このクラブは決闘をしたことのない人には資格がありませんでした。このクラブの会長は果たし合いで6人の命を奪ったと言われていました。そして、その他のメンバーに関しては、殺した人数によって席が決められていました。同じく、単に血を流さただけで機会を捉えて第一のテーブルの資格を得ようとするあっぱれな野望を抱く人たちのためには、サイドテーブルが用意されました。信義を重んじる人たちだけで構成されるこのクラブは、メンバーの大半がクラブ結成後しばらくして刃にかけられるか、絞首刑にあったため長続きはしませんでした。

当世の名高いクラブは、大半の人が考えを同じくする、食べること、飲むことで組織されています。ここでは学識のある人も、無学な人も、活気のない人もある人も、賢人も、粗野な人もみんな一翼を担うことが出来ます。「キットキャットクラブ」⁹⁾そのものは元々羊肉のパイに由来

5) レッド・ライオン・スクウェアの北で、レッド・ライオン・ストリートとデヴォンシャー・ストリートの間にある。

6) トマス・バーネットは1712年3月15日付けのジョージ・ダケット宛ての手紙でこのクラブについて言及しているようである。

7) 「マム」というのはビールの名前でもあるので、このクラブの名称には地口的な意味もありうる。

8) これに関しては、後にスペクテイターの重大な関心事のひとつとなる。

9) 著名なホイッグ党員の集まりであるこの有名なクラブは、1700年頃に創設され、クリストファー・キャットの自宅で初回の集まりをもったと思われる。ハーンは、1705年12月6日、彼のことをクリストファー・キャットリングと呼んでいる。長老のジェイコブ・トンソンが幹事役となり、1703年に、本部はサリー州のバーン・エルムズにあるトンソンの別荘に移された。この別荘には、現在国立肖像画美術館に収められているゴドフリー・ネラーの一連の名高い肖像画が飾られていた。このクラブの会員としては、ハリファックス、サマーズ、サンダーランド、マールボロー、ゴドルフィン、ウォールポールといった著名な指導者の他に、文学者仲間として、アディソン、スティール、ガス、ヴァンブルー、ゴングリーヴ、ウォルシュたちがいた。

したと言われています。「ピフテキクラブ」¹⁰⁾と「十月醸造ビールクラブ」¹¹⁾はそれぞれのクラブ名から判断しても、共に食べることと飲むことを嫌ってはいません。

このように、人々が党派意識ではなく社交を愛する気持ちで結ばれ、その場にいない人を非難したり怒らせたりするのではなく、お互いに楽しむために集えば、また、罪がなく陽気な会話を交わすことで、自分たち自身の進歩のためや他人の幸福のために、あるいは少なくとも一日の仕事の疲れを癒すために結ばれるならば、こういったささやかなクラブには非常に有益な何かが存在するかも知れません。

本日の紙面は私がささやかな居酒屋の壁で見かけました規則の大系を紹介して締めくくりたいと思います。私がどうしてその居酒屋に行ったのかは、読者のみなさんにはまた別の機会にお知らせすることが出来ると思います。この規則は毎晩そこに集まっていた職人や職工のみなさんによって定められました。ここにはどちらかと言えば、社会の下層の人々の状況を提供してくれる何かがありますので、逐一書き写しておきます。

※ 善良な地域住民の親睦を願って、この場所に設立された「二ペンスクラブ」にて遵守すべき規則

第1条 会員は全員、来店時に2ペンス支払うこと。

第2条 会員は全員、自分のタバコを吸うこと。

第3条 会員が病気あるいは投獄中でない場合に欠席したときには、当クラブのために1ペニーの罰金を課す。

第4条 会員が悪態をついたり罵った場合には、隣の人はその者の向こう脛を蹴ってもよい。

第5条 会員が当クラブ内で虚偽の話をした場合には、3回嘘をつくごとに半ペニーの罰金を課す。

第6条 会員が不当に誰かを殴った場合は、その人の代金も支払うこと。

第7条 会員が妻を同伴した場合には、妻の飲み代および喫煙代も支払うこと。

第8条 会員の妻が呼びに来た場合には、ドアの外から声を掛けること。

第9条 会員が別の会員を寝取られ男呼ばわりした場合には、当クラブから追放される。

第10条 会員の中にすでに同一職業の者がいる場合には、その希望者は入会が認められない。

第11条 会員は衣服や靴の修理修繕は会員以外の所でそれを行ってはならない。

第12条 宣誓拒否者は会員になることは出来ない。

このささやかなクラブの道徳はこのように健全な法と刑罰によって守られていますので、ベン・ジョンソンの「食卓での規則」、リプシアスによって引用されているかつてのローマのあるクラブの規則、あるいは古代ギリシャのある作家に登場する饗宴の規則の場合と同様に、このクラブの規則に読者のみなさんも満足なさるものと私は考えます。

10) このクラブはアン女王治世の初期に隆盛をきわめた。

11) ジャコバイト派および過激なトーリー党員で構成された。

第10号 1711年3月12日(月曜日)

【アディソン】

筋肉たくましい船乗りたちは遅々たる歩みだが、

流れに逆らって進む。

だが、手をゆるめると、そうです、努力を止めれば

彼らはたちまち海の中へ真っ逆さま。(ウェルギリウス)¹⁾

ロンドンの町の人たちが日に日に私の新聞のことを尋ねて下さり、また私の朝の講話を真剣かつ注意深く受け止めて下さるのを耳にしてとても満足に思っています。出版元に言わせますと、すでに毎日三千部の売上げになっているということです。そこで一紙につき20人が読むとしますと、これは控え目に考えているのですが、シティーおよびウェストミンスターで6万名の門弟がいることになると私は考えています。私はこの人たちが、数多くの思慮に欠ける無知で注意力散漫な同胞とは一線を画して頂きますよう期待しております。私は非常に多くの読者を集めましたので、骨身惜しまずその教育を一層相応しいものにし、その気晴らしを有益なものにしたいと考えています。そのために、私は読者の皆さんが出来ることならばその日の思索の判断材料が見付かるように、機知で道徳に活気を添え、機知に道徳を加味するよう努めます。そして美德と思慮深さが浅薄な一過性の点滅する思い付きにならないために、私は現代の人たちが陥っている絶望的な悪徳と愚行の状態から人々の記憶を蘇らせるまで、日々その記憶を新たにする努力をする決心をしました。ほんの一日しか利用されないでいる精神は、首をもたげて不断の根気強い教養によって消滅させられるに過ぎない愚行へと成長します。ソクラテスは哲学を人々の間に宿らせるために、それを天界から引き降ろしたと言われました。²⁾そこで私は哲学をクラブや集い、お茶の集いの場やコーヒーハウスに宿らせるために、私室や書斎、学校や大学から持ち出したと言われることを熱望しています。

それゆえ、私はお茶とバター付きパンのために毎朝1時間割くきちんとした家庭のみなさんに、非常に独特な方法で、この私の思索を利用なさるのを勧めします。そして、その人たちが自分たちのために本紙を定期的に食卓に供し、お茶の道具の一部と見なすことを私は心から忠告します。

サー・フランシス・ベーコンは、入念に書かれた書物はその競争相手や敵対者と比べると、たちまちにしてエジプトの蛇を飲み込んだモーセの蛇のようなものと認めています。³⁾『スペクテイター』が発行されているところでは他の印刷物が消滅すると考えるほど私は自惚れは強くあり

1) ウェルギリウス『農事詩』1.201-3.

2) キケロ『トゥスкулム叢談』5.4.10.

3) 『学問の進歩』(1605)第2巻14.

ません。だが、モスクワやポーランドで起っていることを聞くことより自己の知識を知らされることの方がいいかどうか、また、当然の如く憎悪を燃え上がらせ癒し難い悪意を抱かせるようなことより無知、情念、偏見を拭い去るのに役立つ著述を楽しむ方がいいかどうかは読者のみなさんの判断に委ねたいと思います。

次に私の立派な兄弟盟友と考えざるを得ないような紳士諸氏が本紙を毎日お読みになられることとお勧めします。社会で何もすることがない、つまり、潤沢な財産のお陰か単に怠惰な性格のためか他の人たちを眺めるしか他にすることがない観察者の仲間のことを私は言っているのです。この階級には、すべての默想的な商人、肩書きだけの医師、王立協会の特別会員、係争中の問題が与えられていない法律家、そして落選中の政治家が含まれます。要するに、世界を劇場と考え、そこで演じる役者たちを正当に評価しようと願っているすべての人々がこの範疇に入る訳です。

同じく私が権利を主張しなければならない人たちの一団がもう一つあります。その一団は私が最近「社会の空白」と呼んでいるのですが、その日の仕事や会話で他人から与えられない限り自分の意見を全く持っていない人たちのことなのです。私はこういった気の毒な人たちが、出会った最初の人に何か面白いニュースはありませんかと尋ねているのを聞いて、彼らがそうやって考える材料を集めているのだと分かったとき、しばしば彼らを大きな哀れみの眼で見て来ました。こういったひどく窮乏している人は午前12時ぐらいまでは何について喋っていいのか分からないのです。お昼頃までには天候についてはかなり詳しくなっており、どちらから風が吹いているかが分かっているのです。そしてまた、オランダからの郵便が届いているかどうか分かっているからなのです。こういった人たちは最初に出会う人に左右され、午前中に吸収した考えによって、その日一日中真面目になるか生意気になるかのどちらかですので、私はこういった人たちは本紙を読み終えるまでは自分の部屋から出ないように切にお願いしたいと思います。また、私は日々その後の12時間の会話にいい影響を与えるようなきちんとした健全な考えを、この人たちに浸透させることを約束します。

ところで、本紙ほど女性の社会にとって有益なものは他にはありません。女性の適切な仕事や気晴らしを見つけることに今まで十分な骨折りをして来なかったのではと、私はしばしば思っていました。女性の娯楽は彼女たちが道理をわきまえた人間であるからという点からではなく、むしろ彼女たちが女性であるという点から考えられているように思われます。そして彼女たちは種というより性に順応させられることになります。身支度はとても厄介な仕事であり、頭髮を垂直に結うことが生活の主要な仕事となっているのです。一組のリボンを区分けするのが朝のとても大きな仕事と見なされています。そこで、彼女たちが絹織物商や玩具屋に出掛けるとその日は一日何も出来ないほど疲れてしまいます。彼女たちがさらに一層打ち込まなければならないことは縫い物と刺繍であり、最も骨の折れる仕事はゼリーやケーキを作ることです。言うなれば、こういったことが平均的な女性の仕事なのです。もっとも、私はもっと高尚な生活をし、知的で高潔な会話を交わしている数多くの女性たちを知っています。こういった女性たちは精神のあらゆる美と

衣服の飾りを融合させ、自分たちに目を向ける男性に愛はもちろん一種の畏怖と敬意を吹き込みます。私はこの日刊紙を発行することによって、このような女性が増えることを期待します。私はこの新聞が教化とならないにしろ汚れない慰みとなり、そのことによって少なくとも女性読者の精神がつまらないことに向かわないよう努力します。同時に、私はすでに実に見事な人間性を備えている人たちのために、女性の装飾である美德についてはもちろん、汚点である欠陥についても指摘したいと考えています。一方、時間を持て余している穏健な読者のみなさんは仕事の邪魔にはなりませんので、本紙に一日15分間割くことを惜しまないで頂きたいと思っています。

友人や好意を寄せてくれる人たちの中に、私が毎日発行することを義務づけているこの新聞の精神を維持出来ないのではと私のことをとても心配して下さっている人がいるのを承知しています。しかし、この点に関して彼らの気持ちを楽にして頂くために、私は元気がなくなったら直ちに止めますことを固く約束しておきます。私は承知しているのですが、これはおとなしい才人たちへの冷やかしの種になるでしょう。彼らはその口実が与えられるとき、少し頭の切れる人なら親友に対して口にせざるをえない同種の冗談として、始終私に約束を思い出させ、約束を守るよう求め、止めるには潮時だと断言することでしょう。しかし、彼らには私がここにこの冷やかしに対する差し止め願いを提出していますことを忘れずにいて欲しいものと思います。

第11号 1711年3月13日(火曜日)

【スティール】

ハトは非難されるが、カラスは容赦される。(ユヴェリナス)¹⁾

機知と武勇を少しでも主張する男女を問わず、あらゆる人たちがアリエッタのもとを訪れます。彼女は若者の愚行に影響を受ける年齢でもまたお年寄りの欠点に心動かされる年齢でもありません。彼女の話は陽気さと思慮深さが混在していますので、老若を問わず快く受け入れられるのです。彼女の振舞いは非難されるべき点はいささかもなく、とても率直なものです。彼女は自分の好色を追求することもなく、また野心もありませんので、来訪者は彼らの情熱あるいは関心のいかんを問わず、存分に自分たちのことを喋ります。私は以前友人ウィル・ハニコームの知遇を得て彼女を紹介されていたので、昨日の午後彼女のもとを訪れました。ウィルは私のことを礼儀正しい不快感を与えない人物なので、時々彼女の集まりに加えて欲しいと彼女を説得したのでした。先客が一人だけいました。その人はよくある話し好きな人物で、私が入って行くと立ち上がり、軽く会釈をして再び腰掛けました。そして、彼女に向かって話を続けました。彼の話は、私の聞いたところ、愛の貞節という昔からよくある話題でした。彼は非常に流暢に、毎日喋っていることを繰り返していました。そして、意味のない笑いや身振りを加えながら、誓いを破った

1) ユヴェナリス『諷刺』2.63.

人と女性の総体的なだらしなさを仄めかす芝居や歌を引用しながら、彼の話に補強しました。私には彼が私の沈黙を侮辱しようとして、いつにもまして多弁で、アリエッタの審美眼と分別の前で際立とうと努力しているように思えました。彼女は何度も彼の話を見切らせてはいましたが、自発的に止めるまで、その機会は見つけられませんでした。名高いエフェソスの婦人の物語²⁾を繰り返し、話を台無しにしてやっとお喋りが止まりました。

アリエッタはこのからかいの話を女性に対する侮辱と見做しているように見えました。私にはそれが女性の名誉に対するより細やかな心遣いからなのか、それとも別の理由からなのかは分かりませんが、女性たちは自分たちに投掛けられるそういった中傷に対して、男性よりも敏感に反応するのを私は実際に観察して来ました。

彼女は本気で怒っていたのですが、その怒りが少し落ち着くと、次のように答えたのでした。そのテーマであなたが話したことがどれほど目新しいことか考えてみますと、そしてその物語が二千年に少し足りない昔のことを考えてみますと、あなたと争うのは失礼なことと思わざるを得ません。でもあなたの引用文を聞いていますと、私は「ライオンと人間」の物語³⁾を思い出しました。あの気高い動物と歩いている人が、人間の方が優れているのだということを見せびらかせて、ライオンに人がライオンを殺す身振りをして見せました。それに対してそのライオンは極めて正確に「私たちライオンは誰一人画家ではありません。人間に殺される一頭のライオンの代わりに、私たちはライオンに殺される百人の人たちをお見せ出来るでしょう」と言いました。あなたたち男性は作家であり、私たち女性を作品の中で好きなだけ見苦しく描くことが出来ます。あなたはお話しの中で二、三度、偽善がまさに私たちの教育の土台であり、女性の愛情を偽る能力は公然と行儀作法の一部になっているのだと、おっしゃいました。こういったことおよびその他これに類した意見は、特定の女性から受けた嘲笑に対する恨みの思い出を女性全般に対する侮蔑的な言辞でもって後に残す著者の手で、あらゆる時代にわたって著述のあちこちに散りばめられています。そのような作家の一人が名高いペトロニウスだったと私は思います。彼は面白がってエフェソスの婦人の弱さをでっち上げたのです。しかし、男と女が存在するようになってからずっと論争ないし毒づく対象となって来た男女間のこの問題を考えるとき、腹藏のない人たちおよび自分たちの話を美しい想像力で潤色しようとする野心も能力も持ち合わせていない人たちの事実を取り上げてみましょう。私は先日リゴンのバルバドス始末記を読んでいました。あなたのよくで出来たお話に対するお返しに、記憶を頼りに、あの誠実な旅行家の書の55ページに載っているインクルとヤリコの物語⁴⁾をお話致しましょう。

2) この物語は『サティリコン』第2部で述べられている。

3) イソップ『寓話集』219。

4) リチャード・リゴン『バルバドス諸島実史』(1657)。アキリーズ号で西インド諸島まで出掛けたことのあるリゴンは、ヤリコのことを植民地のキリスト教信者の召使との間に子供をもうけたインディアン奴隷として描写する。インクルという名前（これは広幅のリンネルテープのこと）、若い商人の人物描写、彼のヤリコ誘惑などはスティールがリゴンの逸話に付け加えたもの。このテーマは18

「ロンドン生まれの20歳の若者トマス・インクルは通商で一旗挙げようとして、1647年6月16日、ダウنزから西インド諸島に向かうアキリーズ号という立派な船に乗り込みました。この冒険家はある著名な市民の三男でした。彼は数字を完全にマスターし、損得勘定は素早く、まず第一に自らの利益を考えることで、生来の衝動的な情熱に先手を打ち、早い時期から利得を愛する心を養うことに特別の配慮をして来たのです。このような考えを持った若者インクルは顔の血色も良く、四肢は頑健で、金髪の巻き毛が両肩にふわりとかかったどこから見ても感じの良い青年でした。アキリーズ号は航海中にたまたまちょっとした遭難をして、糧食を求めてアメリカ本土のある入江に横付けしました。私の話の主人公であるこの若者はこの機会を捉えて上陸の仲間に加わりました。彼らが初めて上陸した時点から、森に身を隠しているインディアンたちに監視されていました。イギリス人たちは軽率にも浜から随分奥地まで入って行きました。そして原住民たちに捕らえられ、その大半が殺されました。森の中へ逃げて助かった一人にこの冒険家がいきました。彼は森の遠く離れて道もないところまでやって来ると、疲れて息も絶え絶えになって小さな塚の上に身を投げ出しました。するとそこへ突然、一人のインディアンの娘が彼の背後の茂みの中から出て来ました。初めは驚きましたが、二人はお互いに気が合ったように見えました。このヨーロッパ人が裸のアメリカ人の四肢、目鼻立ち、そして粗野な魅力の虜になったとしたら、このアメリカ人もまた頭の前から足の先まで覆っているヨーロッパ人の洋服、肌の色、体つきに、同じく心を奪われたのでした。このインディアン娘は直ちに彼に魅了されました。そこで、彼女は彼の保護を気にかけ、彼を洞窟へ連れて行きました。そして、その洞窟で彼女は彼に美味しい果物を与え、喉の渇きを癒すために小川へと案内しました。こういった好意を寄せながら、彼女は時折彼の髪の毛をもてあそび、髪の毛の色が彼女の指先の色と違うのを喜ぶのでした。そしてまた、彼の胸元を開き、胸元を隠していることで彼に笑いかけるのでした。彼女は良家のお嬢さんだったように思えます。何故なら、彼女は毎日とても奇麗な貝殻、ガラス玉で出来た違った服を着て、三つ編みの髪も変えて彼のところへやって来たからです。彼女はまた、彼のところへ他の恋人から貰った色々なものを持って来ました。その結果、洞窟はその地で産出されるありとあらゆる斑模様の獣皮や多彩な鳥の羽毛で見事に飾り立てられました。彼の幽閉状態を我慢出来るものにするために、彼女は夕暮れにあるいは月明かりを頼りに、彼を人の行かない木立ちや人気のない場所へと連れ出し、安全に横になれる場所や滝に囲まれ、夜鳴鶯の鳴き声を耳にしながら眠れる場所を教えてあげました。彼女の役割は住民に見つからないように彼を抱いて、眠らずに警戒しておくことでした。そして、彼の身の安全にかかわる場合には彼を起こすことでした。このようにして二人は日々を過ごしました。そのうちに、彼らは二人だけに通用する言葉を身につけていました。その言葉を用いて、この航海者は母国と一緒に帰れたらどんなに幸せだろうかと、母国では彼女に自分の胴着と同じ絹の服を着せ、雨風に打たれない馬車に乗せてあげられるだが

世紀の読者の想像力を掻き立て、イギリスだけでなく、フランス、スウェーデンなどでも大変な人気を呼んだ。

と、恋人に伝えました。こういったことを彼は自分たちが苦しめられるという恐怖も懸念も交えずに、楽しそうに彼女に約束しました。二人のこのように仲睦まじい生活が数ヶ月にわたろうとしていました。そのとき、ヤリコは恋人に知らされ、海岸に一隻の船を発見し、その船に向かって合図をしました。そして夜中に、彼女は大喜びでまた大いに満ち足りた様子で、バルバドスに向かう彼の国の船の乗組員ところへ、彼を連れて行きました。本国からの船がバルバドスに着くと、植民者たちは海岸にやって来るようです。そして、そこで即席の牛馬市やインディアンおよび他の奴隷市が立つのです。

簡単に言いますと、トマス・インクルは今やイギリスの領地に入り込んでいますので、真剣に時間の空費に思いを馳せ、ヤリコと共にしていた期間の金利の損失を重要視し始めました。こう考えると、この若者は航海を共にする友人たちにどんな説明が出来るのかということで考え込み、慎重になりました。そう考えたこの打算的で儉約家の若者はヤリコをバルバドスの商人に売り渡しました。この気の毒な娘が自らの状態を哀れみ、お腹に彼の子供を宿していると言ったにも拘わらず、彼は彼女を売り渡したのです。彼は子を孕んでいるという情報を利用し、買い手に対する要求を吊り上げる材料にしたに過ぎなかったのです。」

この話はエフェソスの婦人の物語の対になるべきだと思いますが、私はこの物語にとっても感動しましたので、目に涙を浮かべて部屋を出て行きました。アリエッタという良識の持主が語ったこの物語は他の如何なるお世辞にもまして、大いなる喝采を浴びるものと私は確信しています。

第12号 1711年3月14日（水曜日）

【アディソン】

私は私の震えおののく心から迷信を払拭する。（ペルシウス）¹⁾

私はロンドンに出て来たとき、気に入った家に落ち着くにはしばらく時間がかかりました。最初の下宿はお節的な女主人が毎朝良く眠れたかと尋ねるので、出て行かざるを得ませんでした。次は誠実な一家に世話になり、一週間以上にわたってとても幸せに暮らしました。だがその頃、とても陽気で人の良い家主は私が話し相手を欲しがっていると思い込み、私を一人にしておかないよう頻繁に私の部屋にやって来るようになりました。私はこれには二、三日でうんざりしました。ある日、この家主が私が塞いでいるのではと言ったので、出て行く潮時だと考え、その晩には新しい下宿に移りました。一週間後、私が先程言いましたように誠実で親切な人物であるこの陽気な家主が『日々新報』（デイリー・クーラント）²⁾に次のような広告を掲載しているのに気

1) ペルシウス『諷刺』5.92.

2) スペクテイターの印刷業者のひとりサミュエル・バックリーが印刷。1702年から1714年まで発行された。奥書によると、1714年9月25日号からは印刷はS. グレイ、発売はファードとなっている。

づきました。「ある憂鬱症の男性、先週木曜日の午後下宿を出奔。その後イズリントン方面に向かった模様。³⁾ この人物について情報をお持ちの方はストランド街の魚商R. Bまでご連絡を。薄謝進呈。」私は黙っていることにかけては人後に落ちず、家主の魚商も私の名前を知らなかったので、私のこの出来事はまさに今日のこの日まで誰にも悟られていないのです。

私は現在はある未亡人のもとに落ち着いています。彼女にはとても大勢の子供があり、あらゆる面において私の気質に合っています。この5年間言葉を交わした記憶はありません。コーヒーは頼まなくても毎朝部屋まで持って来てくれます。暖が欲しい場合には暖炉を、水が欲しい場合には洗面器を、指差します。それに対して女主人がうなずきます。彼女は私の言いたいことが分かっていると言わんばかりに、即座に私の合図に応じます。また、彼女は子供たちをととても上手に躡っていますので、幼い男の子が私のコートを引っ張ろうと手を差し出したり、不意に片言を言いかけたりすると、一番上の娘がすぐにその子を呼び寄せ、紳士の邪魔をしないようにと言うのです。初めてその家に行ったとき、私が部屋に入るたびに、丁寧にも全員が立ち上がって礼を尽くすので困りました。でも女主人は、その場合私がいつも不快にヘンと言って出て行くのに気づいて、家の中でのそのような虚礼を禁止しました。そこで現在では、私は皆の心配りを受けずに、また彼らの仕事や話の邪魔をせずに、台所や客間に入っていくことが出来ます。実に優秀な主婦であるこの女主人は私が居る居ないに関係なく召使たちを叱るので、お手伝いは私が傍に居るのですが、紳士はこれから食事にお出掛けになるのかどうかを女主人に尋ねることになります。要するに、私は猫かその他の飼い馴らされた動物と同じように、気ままに家の中を動き回り皆の中に入っていきます。そして見聞きすることを私が喋るとは誰も思っていない。

この前の冬に、近所の女の子たち数人が女主人の娘たちと一緒に暖炉の傍に座って妖精や亡霊の話をしていたのを覚えています。私がドアを開けると、女の子たちは急に話を止めました。だが、女主人の娘がみんなにこの方は正真正銘の紳士、その家でも近隣でも私はその名前で通用していたのですが、だと言って、私のことは気にかけずに話を続けました。私は部屋の片隅のテーブルにある燭台の傍に腰を掛け、ポケットから取り出した本を読む振りをしながら、ベッドの脚のところに立っていたり、月明かりを頼りに教会の中庭を歩いて行く真っ青な数種類の恐ろしい幽霊の話に耳を傾けていました。中には人々の睡眠をかき乱し、夜中にカーテンを開けるために紅海に呼び出された幽霊がいました。その他老婆たちがよく話題にするような話がいくつも出て来ました。ある亡霊がまた別の亡霊を呼び寄せますので、ひとつひとつの話が終わるたびに、皆間隔を詰め暖炉の周りに固まるのが分かりました。特に幼い男の子が目につきました。この子はあらゆる話に非常に集中していましたので、これから先一年間は眠れないのではと私は思いました。実際、彼らは長時間にわたってお喋りをしましたので、皆の想像力は明らかに異常をきたし

3) この記述をもとに、ニコルスおよびその他の初期の編集者は、「私」の署名の入ったアディソン担当の紙面はイズリントンで書かれたと推定したのかもしれない。アディソン、スティールがイズリントンに住んでいたことを明らかにするものは何もあがっていない。

ていました。生きている限りそれは更にひどくなることと私は確信します。肩越しに私を見ていた娘の一人が、私がいつからこの部屋に居たのか、顔色は青ざめなかったかとみんなに尋ねているのが聞こえました。これを聞いて、私は退散しなければ自分の考えを求められるのではという不安を覚えました。そこで、私は燭台を手にして、理性を備えた人間が好き好んでお互いに恐怖を与え怖がらせあうこの説明しがたい人間の弱さを不思議に思うこともなく、自室へと上がっていきました。もし私が父親だったら、私の子供には幼いときに罹りやすく、成長した後でも振る払うことの出来ないそんな空想上の恐怖は味合わせないように特別の注意を払うことでしょう。私は自分の影に脅えて紫の裂け目に入り込み、ドアに付いている小さな傷を見て青ざめる、前日に砲台まで進軍して来た兵士を知っています。木の形やカヤツリグサが揺れるのを見て、気も狂わんばかりに脅える人の事例もあります。実は私は備わった想像力を、明快な判断力と良識に継ぐ人生最大の祝福だと見做しています。話し変わって、大半の人は多少とも精神がこのように恐ろしい考えや不安に影響を受けますので、私たちは理性と信仰の指図を仰いでそういったものから身を守らなくてはならないのです。本紙の題辞として引用しましたペルシウスの言のように「私たちの心から迷信を引きずり出すのです」そして私たちがその不合理性が判断出来なかった時期に吸収したその不適切な考えを絶つのです。あるいは、多くの賢人や善人たちのように、私が今語って来たような亡霊や幽霊の存在を信じるのでした、全創造物を掌中に収め、神の知らないうちに、また許可なくして互いに抜け出せないように、全創造物を掌握している神に対する関心の確立に努めようではありませんか。

私自身に関しては、ややもすると自然界はいたるところに妖精が群がっていて、一人で思索に耽けるときには、多数の観察者が私たちのすべての行動を見ているのだと信じている人たちの考えに賛同しそうになります。しかし、私はそういった考えには脅えないで不思議にもいつもそのような無数の仲間と共に、創造の驚異の探索をし、称賛と崇敬の仲間に加わっているのだと考えて満足しているのです。

ミルトンはこういった樂園における人と天使の交わりについて見事に描写しています。⁴⁾そして、おそらく次の一節の三行目とほぼ一言半句違わないかつてのヘーシオドス⁵⁾の詩句に注目したのでしょう。

また考えていけません。たとえ見る人が誰も居なくても、
天を仰ぐもの、神を称えるものが居ないと。
夥しい数の天使たちがこの地上を歩き回っている、
私たちに見えないところで、目覚めているときも眠っているときも。

4) 『失樂園』第4巻 675-88。

5) 『労働と日々』第1巻 250-1。1635年に出版されたラルフ・ウィンタートンの編集した詩集では2-115ページまでがヘーシオドスの詩。アディソンはこの詩集をしばしば利用しており、つぎの引用はこの詩集の1677年版15ページに掲載されている。

絶え間なく称賛の言葉を口にしながら、神の御業を見ている
 夜となく昼となく。私たちはいかにしばしば聞いたことだろう、
 こだます丘から、あるいは森の繁みから、
 真夜中の空に響き渡るのを、
 あるときは唯一人、またあるときは他のものと調子を合わせて、
 偉大な創造主を称える天使の声を。
 彼らは見張りに立つときも夜回りをするときも、
 楽器を奏でる天上の妙なる音に合わせて
 隊列を組んで、見事に調和のとれた歌を合唱するのが、
 その歌声は夜の分岐点になり、私たち人間の想いを天国へと向かわせてくれるのです。

第13号 1711年3月15日(木曜日)

【アディソン】

あなたがライオンなら、如何なる振舞いをしますか。(マルティアリス)¹⁾

近年、ヘイマーケット劇場でのニコリーニ氏とライオンの闘いほどロンドンの人たちに大きな楽しみを与えたものは他にはありません。²⁾ この闘いは英国の大方の紳士諸兄のためにしばしば展覧に供されて来ました。この作爲的な闘いが最初に噂になったとき、ライオンはオペラが上演されるたびにハイダスペースに殺されるため³⁾、ロンドン塔から送り込まれているのだと、栈敷席の人たちから確信ありげに主張され、今もそう信じられています。この噂は全く根拠のないものですが、劇場の二階席一帯に広く行き渡りましたので、そこに居たとても洗練された政治家たちのうちの幾人かがこのライオンはウィリアム王時代に登場した虎の従兄弟なのだ⁴⁾、そして、また公演中は公費でライオンが調達されるだろうと囁きました。また多くの人はこのライオンが

1) マルティリアス (A.D.40?-104?) 『エピグラム』12.92.4.

2) ロンドン塔で飼われていたライオンやその他の動物はしばしばショーに利用された。トマス・ブロックバンクは1695年にライオンだけでなくオオヤマネコ、ヒョウ、ヤマネコなどのショーを見た(トラップス・ロマックス編『日記および書簡集』)。

3) フランチェスコ・マンチーニ作 *L'Idaspe fedele* (台本はジョバンニ・キャンディと考えられる) は1711年および1712年に最も人気のあったイタリア・オペラ(スペクテイターに16回登場)。*Idaspe* と *Almahide* はロンドンで初めて全曲イタリア語で歌われたオペラ。*Hydaspes* の初演は1709/10年3月23日で、主人公役はニコリーニ。ライオンとの格闘は当時いろいろ話題となった。

4) ポストマン紙3月2日号に、3月9日に王立コックピット劇場において「先だってストック・マーケットにお目見えした東インドの虎と熊いじめ用の巨大な犬3頭との対決がある」との予告が掲載された。さらに3月11日号の同紙に「先日の木曜日、コックピット劇場にて犬4頭が次から次へと虎に襲い掛かる。最初に襲い掛かった犬は瀕死の重傷を蒙ったが、残り3頭は善戦し、虎対犬の闘いはほぼ互角。ただし、虎の喉元を覆う首輪がついていなかったら、虎の負けになったかもしれないと見るむきもある。」との記事が載った。

ニコリーニ氏から受ける扱いに対して当て推量をしました。彼はオルペウスが当時野獣の機嫌を取りその後で頭を打ったように、叙唱（レチタティーヴォ）のところで、ライオンを抑えることになると考える人もいました。また、ライオンは処女を傷つけることはないという広く受け入れられている言い伝えから、このライオンは英雄に足を掛けはしないだろうと思う人もいました。イタリアでこのオペラを観たことがあると触れ込んでいる人たちの中には、友人たちにライオンは高地ドイツ語で役を務めることになり、ハイダスペースの足元に倒れる前に通奏低音で二、三度唸るのだと触れ回る人が何名か居ました。私はこのようにさまざまに噂されている事柄を整理するために、この真偽の疑わしいライオンは見かけどおりに実際に残酷な獣なのか、それとも単なるまがい物なのかを調べることを私の務めとしました。

さて調査結果をお伝えします前に、私は読者の皆さんに次のことをお知らせしなくてはなりません。実は他のことを考えながら舞台裏を歩いていましたとき、偶然大きな動物に出くわしたのです。私はとても驚きました。そして、更に近づいてみますと、それは後ろ足で立ち上がったライオンのようでした。そのライオンは私がとても驚いているのを見て、穏やかな声で、よろしかったら傍までいらっしゃいませんかと言いました。「誰も傷つけはしませんので」とそのライオンが言うのです。私は懇ろに謝意を表し、その申し出を断りました。そのすぐ後で、そのライオンが舞台に飛び上がり、大変な喝采を浴びながら演じているのを目にしました。このライオンは最初に登場してから二、三度演技の方法を変えたと観察している人たちがいます。ライオン自体が二、三度代わったのだと読者の皆さんにお知らせすれば、そのことには何ら不思議なことはないでしょう。最初のライオンは蠟燭の火消し屋だったのです。この人物は短気で癪癪持ちなので、役柄の度を過ぎ、想定されているように簡単には殺されませんでした。その上、彼はライオンの縫いぐるみから出て来る都度、より一層不機嫌になっているのが分かりました。そして普通の話の中で、全力を投入しなかったようなことを漏らすのでした。また、彼は取っ組み合いで仰向けにされたのだということが分かりました。もし彼がもう一度舞台に上がっていたら、きっと危害を加えていただろうと今日まで真剣に信じられています。それだけでなく、最初のライオンに対しては後ろ足で立ち過ぎ、あまりにも直立姿勢で歩き過ぎるので、ライオンというよりは老人に見えるとの不服が寄せられたのでした。

二番目のライオンは職業が洋服屋でした。彼はこの劇場に所属しており、穏やかでおとなしい性格の持主でした。最初の人々が激しすぎるとすれば、この人物は役柄の割りにはおどおどし過ぎでした。舞台上で控え目にさっと歩いてハイダスペースと触れただけで、彼と取っ組み合いをし、彼にイタリア人の軽快な足取りを取らせる機会を与えることもなく、あっけなく倒れるほどでした。実際には、このライオンは一度彼の肌色の胴衣にほころびを作ったことがあると言われていました。でも、これは単に彼の個人的な洋服屋の資格で、自分の仕事をこしらえるためだけだったのです。舞台裏で私に対して非常に親切に接してくれたのはこの二番目のライオンだったということを付け加えておきたいと思います。

現在出演していますライオンは、聞くところによりますと、地方の郷土ということです。彼は遊びでこの役をやっており、名前は秘密にしておいて欲しいとのこと。彼は言い訳にお金のためにしているのではなく、無邪気な喜びを味わっているのだと鷹揚に言っています。そしてまた、賭博や飲酒よりもこのようにして夕べを過ごす方が良いのだと言います。でも同時に、彼は愉快そうに自分のことをからかいながら、もし自分の名前が知れたら、意地の悪い世間の人たちは自分のことを「ライオンの皮を被ったろば」⁵⁾と言うだろうなと言います。この紳士の気性は穏やかさと癪癪持ちの部分が見事に混ざり合っていますので、彼は二人の前任者を凌いでいます。そして、それまでに多くの観客を呼び寄せました。

私の話の結びとして、私が崇拝していますある紳士が不利になるようにと提出された根拠のない噂について一言述べておかななくてはなりません。すなわち、ニコリーニ氏とライオンは舞台裏ではお互い穏やかに腰を掛けパイプをくゆらせているのです。そのことで二人の共通の敵は舞台上で演じているのはごまかしの闘いだと言ひ嫌みを言うでしょう。でも、私は調べてみて、二人の間にも何かそういった相通じるものがあるとしたら、闘いが済んで、演劇で広く受け入れられている約束事によって、それはライオンが死んだと見做された時点からのことだということが分かります。なおこれはウェストミンスター・ホールで毎日行われていることです。二人の弁護士を見ると、このことはよくお分かり頂けるでしょう。彼らは法廷では互いに相手をこき下ろしあいをするのですが、いったん法廷から出てしまえば抱き合うのです。

この話の如何なる部分においても、私はニコリーニ氏の体面を傷つける意図は毛頭ありません。彼はこの役を演じるとき、観客の貧弱な趣味に合わせているに過ぎません。彼はライオンの方が自分よりもはるかに多くの崇拜者がいることを十二分に知っています。パリのボンヌフにある名高い騎馬像⁶⁾について、馬に跨った王様よりも馬を見に行く人の方が多いのだということです。一方、私はその人物の演技が王様たちに新たな威厳を、英雄たちに不屈さを、恋人たちに優しさを与える人物を見ると正当な憤りを覚えます。そうすることで彼は偉大な振舞いが徐々に消え、ロンドンの徒弟⁷⁾へと落ち込んだのです。私はしばしば我が国の悲劇役者たちは動きはこの偉大な名人をお手本にして欲しいものと考えています。もし彼らが腕や足を同じように活用し、顔には意味ありげな表情と情熱を漲らせることが出来れば、不自然な考え、冷ややかな思い付き、イタリアオペラの不自然な表現に、威厳を付与することの出来る演技が可能になり、我が国の悲劇は非常に荘厳に見えることでしょう。話変わって、私がこのライオンの闘いの話をしましたのは現在我が国の洗練された人たちの間での支配的な娯楽を紹介するためだったのです。

5) イソップ『寓話集』224。

6) もともとボンヌフにあり、ジョバンニ・ボローニャが製作したアンリ四世像。1614年に建立されたが、1792年には大砲を作るために取り壊された。ジョン・イーヴリンは1643年12月24日の日記でこの「実物よりはるかに大きなアンリ王の有名な像」について記している。

7) 人気のあった民謡。

観客はしばしば作家たちからその趣味の悪さを非難されています。しかし、私たちの現在の不平の因は良い趣味の欠如ではなく、常識の欠如のように思えます。

第14号 1711年3月16日（金曜日）

【スティール】

あなたは何と恥知らずなのです。その途方もない姿を脱ぎ捨てなさい。（オヴィディウス）¹⁾

今朝私は、25年前と今日の国民の遊びの精神と気質について考えていました。そして、25年前には道徳は無視されていましたが、良識はあったのだと一人で悲嘆にくれました。ところが現在では、上流社会は以前よりも無邪気とは言えませんが、幼稚になっているのです。私がこういつたことを考えていましたら、劇場で何度も顔を見掛けたことのある風変わりな人が「拝啓、ライオンがあなたに宜しくと申しています。そして、私にこの手紙をあなたの元に届けて欲しいとのことです」という言葉を添えて以下の手紙をよこしました。

3月15日ヘイマーケット劇場の私室にて

拝啓

あなたの新聞にはすべて目を通しています。オペラに関するあなたの意見に対して覚える憤りを本日の新聞まで抑えて来ました。そこではあなたはグリマルディと私の間には、彼の性格の豪胆さあるいは私の激しさと矛盾しないというよりそれ以上に友好的な関係があると、率直に嫌みを表明なさっています。今後はあなた自身のためにもそういった嫌みは差し控えて頂きたいと思います。外国人に対するあのような過大な評価を示すことで、同国人のライオンを落胆させるのは、あなたの中に宿るひねくれた性格のなせるわざと言わざるを得ません。

あなたのライオンと人の物語は目に留まりますが、私も同様にこれには関心を持っていますので、どちらに優位性が与えられようと私は気を悪くはしません。私が遊びで演技をしているに過ぎない地方の郷土だと言っておられるのはあなたの誤解です。もし今も私が狐狩りをするときにかつてのようにうろつくことが出来る森を所有していれば、管理に必要な勇ましさを放棄しないでしょう。現在私の暮らし向きは落ち込んでいますが、私はとても信義を重んじる人間なので、ライオン以外の獣で糧を求めることを潔しとしないのです。

敬具

私がこの手紙を読み終えるや否や、女主人の娘の一人が別の手紙を数通持って来ました。そのうちの何通かを紹介して本日の紙面を埋めたいと思います。どの手紙も同じテーマ、すなわち、

1) オヴィディウス『変身物語』4. 591.

今日の遊びの優雅さというテーマを扱っています。

3月13日コヴェントガーデンにて

拝啓

私はコヴェントガーデンのこのセントポール教区で寺男の助手をして20年になります。そして、この間一日六回のお祈りの時間に鐘を撞き忘れたことはありません。私はこの二週間前まではその仕事をとても満足して務めて来ました。ところがその頃、信徒たちが朝晩鳴らす私の鐘の音を、パウエルという人物が広場で行う人形芝居²⁾を見に行く合図と受け取っているのに私は気づいたのです。この人形芝居のせいで私は二人のお得意さんを失っただけでなく、私はその人たちのためにレイチェル・アイブライト婦人の真向かいに一人六ペンス置いていたのですが、レイチェル婦人その人も芝居に行ってしまったのです。今では教会に来てお祈りをするだけの平凡な人しか教会には顔を見せないように思われます。そこで私には日曜日以外にはお話して価値のあるような仕事はありません。私は息子を広場に行かせて、教会の鐘が鳴っており、教会はガーデンの向かい側ですとご婦人方に伝えさせました。ところが、彼女たちは子供を見て笑っているだけなのです。

私は今後は人形芝居の手先にはならない、そしてパンチネロは教会の時間と関係のない時間を選ぶようにと世間に向かって主張して頂きたいと思います。目下のところ、パウエル氏は会衆を沢山抱えています。その一方で私たちの教会は閑散としているのです。あなたの新聞のお力でこの状態を救って頂ければ何よりの幸いと存じます。

敬具

次の書簡は仮面舞踏会の請負人からのものです。

拝啓

私は人物の問い合わせをしないという点において、仮面舞踏会の規則を非常に慎重に守って来ましたので、先週の火曜日にあなたがいらっしゃったかどうか私には分かりません。でも、あなたが参加していなくてこれから先の参加を考えていらっしゃるのだとしたら、あなた自身の楽しみのためにも、どうかロンドンの人たちに、必ずしもすべての人たちが公平にこの種の遊びには相応しくはないのだということを警告しておいて頂きたいと思います。あなたの新聞で仮面舞踏会に出掛けるのは一種の演技なのだということを分からせて頂ければと心から願う次第です。参加者

2) 当時非常に人気のあった人形芝居はマーティン・パウエルという人物が操作していたものであった。彼はそれまでバースやその他の地方都市でマリオネットを操っていたが、1710年初頭にロンドンにやってき、パンチ劇場やリッチフィールド・ストリートに隣接するセント・マーティンズ・レーンなどでバーレスクやその他様々な喜劇的な見世物を上演した。

は身につけている衣装に相応しいことを言ったり行ったり出来ないと駄目なのです。私方に時々ローマの元老院議員の衣服でお見えになる放蕩者や放蕩者の衣装でお見えになる威厳のある政治家の皆さんがいらっしゃいます。このことの不幸は人々が相応しい衣装は何かではなく、そうなりたいと考える衣装で身を飾るということなのです。ロンドンでは大半の娘さんは仮面舞踏会に行きたいと考え、羊飼いの女の衣装を着てやって来るのです。でも私方のところにそういった役柄でお見えになる前に、アルカディア³⁾が何か素晴らしいロマンスを読んで頂きたいと思います。この前の仮面舞踏会では、皆さんとても無分別な格好をしていましたので、お互いに話をする段になりましたら、牧杖を手にした娘さんは闘犬場で活発に飛び交う淫らな言葉以外には語るべき言葉がありませんでした。そして、哲学者の衣服を身につけた男性は楽屋のゴミの中で口を開くまでは無言でした。六人の道化が傍で見守る中で、クエーカー会員を相手にメヌエットを踊る裁判官がいました。トルコ人はワインを二本空けました。ユダヤ人はベーコンを半分平らげました。私の意図を生かして参加者に舞踏会で彼らの人格を失わせないでおくことが出来たら、この舞踏会には現在ロンドンの町で提供する如何なるものにもまして優美のためになる武勇のための出発点があることをあなたにお認め頂ければと希望します。従いまして、是非とも私方の努力をお認め頂きたくお願い申し上げる次第です。

敬具

次の書簡によりまして私が同一紙面で再度パウエル氏のことを触れざるを得なくなりましたことを嬉しく思います。彼がしかるべき制約下にあるとしましても、彼の巧みな活動に対してはそれほど奨励出来ないからです。

拝啓

現在ロンドンの主要な気晴らしがコヴェントガーデン界隈に二つあります。それはヘイマーケット劇場のオペラとパウエル氏の人形芝居です。『リナルドとアルミダ』に対してパウエル氏は『ホイッテントンと猫』⁴⁾をうつと宣伝で謳っています。私は好奇心に駆られ先週初めその二つを見て来ました。そこで、その感想を述べさせて頂きます。

まず最初に、パウエル氏は賢明にも出し物の内容をあらかじめ客には見せず、場面はすべて目新しく予期しないものになっていることに気づきます。ところが一方、ヘイマーケット劇場の請負人は活字にされたオペラつまり台本にあまりにも過剰な期待を寄せ、それだけ舞台では観客を失望させるのは確かです。

エルサレム王はシティーから台本に書かれていたように白馬に引かれた立派な馬車でではなく、

3) フィリップ・シドニー (1554-86) の作品。1590年出版。

4) ディック・ホイッテントンと猫の物語は以前からチャップブック (呼び売り本)、バラッド、および人形芝居のテーマとして人気があった。

徒歩でやって来ざるを得ないのです。私はアルミダの竜がアルガンテスに向かって襲い掛かるのを期待するのですが、この英雄は余儀なくアルミダのもとへ行かされ、馬車から彼女の手を取って助け出さざるを得ないのです。また、雷鳴も稲妻もごく短いものでした。ここでは二匹の描かれた竜を任せ、竜に火と煙を吐かせる役の少年に対する公平な評価を怠ることは出来ませんが、彼は妥当な分量の樹脂にとってもいいタイミングで火を付けましたので、いつの日か素晴らしい役者になるという期待を抱かざるを得ませんでした。だが実際には、私は彼の所作全体を完全なものにするには二つの事が必要だと気づきました。つまり、頭をもう少し低くしておくことと蠟燭を見えないようにしておくことが必要なのです。

パウエル氏とヘイマーケット劇場の請負人は同じ考えをしていたと私は思います。同じ時期に彼らは舞台に別々の結果をもたらしたのですが、動物を持ち込むことを考えたのだと思います。ヘイマーケット劇場のスズメやズアオアトリは今までのところ非常に出鱈目に舞台上を飛ぶのです。この未熟な役者諸君は木々に止まって役をこなす代わりに、棧敷席に入り込んだり蠟燭を消したりするのです。ところが、パウエル氏は豚をとっても上手く訓練しており、第一場でこの豚はパンチとメヌエットを踊るのです。しかしながらパウエル氏は相手方に対して彼らの専門分野で抜きんでて彼の次のオペラ『スザンナまたの名を裏切られた純潔』で雲雀を持ち込もうと決意しているとの情報が私の耳に入っています。このオペラは来週二人の新人エルダーによって公開されます。

実を言いますと、パウエル氏の芝居の道徳性は、フランス人についてのパンチの愛国的な所見と非常に多くの人々の眼前であまりにもおどけた様子で女王の膝に足を乗せるハリー王によって侵害されています。

カラクリと道具立てに関しては、すべて実に均質で首尾一貫しており、場面は大変巧妙に扱われています。このことによって私はヘイマーケット劇場では請負人が書割りを変えるのを忘れており、快適な木立ちの中央に海洋の景色が現れたのを思い出します。そして、舞台上の紳士たちは木々の間をあちこち歩き回ることによって木立ちの美しさに大いに貢献していたのですが、正直言いまして、私は長髪の鬘を着けた立派な若者が目に入ることは何ら関心を示さず、嗅ぎ煙草を嗅ぎながら海の中央に現れるのを見て少なからず驚きました。

双方の芝居に共通するのですが、更にもう一言だけ述べておきたいと思います。それは主人公たちがともにそのキーキー声から分かるように、意気地なしであるということです。機知については双方とも互角ですので、私はパウエル氏の公演に軍配を挙げなくてはなりません。何故ならこちらは自国語で行われているからです。

第15号 1711年3月17日(土曜日)

【スティール】

浮ついた心は些細な事に満足する。(オヴィディウス)¹⁾

フランス滞在中私はよくその風変わりな国民の華麗な馬車と色とりどりの衣服を非常に仰天して見つめていました。²⁾ ある日、私は金箔のキューピッドで飾り立て、ヴィーナスとアドニスの見事な愛の絵が描かれた馬車に乗っている婦人を事細かにじっと見ていました。その馬車は六頭の乳白色の馬が引き、後ろには六人の頭に髪粉をふった召使が従っていました。婦人のすぐ前には二人の美しい小姓がいました。この小姓たちは引き馬具の間に張り付いていました。そして、彼らはきらびやかな服装とにこやかな顔立ちから、馬車の四隅に刻まれ描かれている少年たちの兄のように見えました。

この婦人は、その後素敵な物悲しい小説を書かせることになった不幸なクレアンテでした。彼女はある紳士から数年間にわたって言い寄られていました。大金持だが気質が狂気じみているある人物から提供されていたこの豪華な馬車のせいで、彼女はその紳士と久しく親密に交際した後で彼を見捨てたのでした。私が見掛けたときの彼女の状況は単なる傷心の偽装であり、悲嘆を隠す一種の虚飾であったように思われます。と言いますのは、その二ヶ月後に彼女は同じく壮観かつ荘厳に墓場まで運ばれて行ったからです。これはひとつには一人の恋人を失ったからであり、ひとつには別の恋人が出来たからでした。

私はしばしばあらゆることが派手で皮相的なことに魅了される女性の奇妙な気質について考えます。そしてまた、この浮ついた風変わりな気質が原因で、女性に降りかかる数知れない罪悪について思いを巡らせます。私は二人の執拗な相手からとても熱烈に言い寄られた若い婦人のことを思い出します。この二人は数ヶ月連続して慇懃な振舞いと快い会話によって気に入って貰おうと全力を尽くしました。ついにその競争が覚束なくなり、その婦人の選択の決心が着かなくなったとき、一人が大変運良く服装にレースを余分に着けることを思い付きました。これがとても功を奏し、彼はその1週間後に彼女と結婚をしたのです。

平凡な女性が交わす平素の会話では外観にとらわれるというこの生来の弱点が大事に育まれます。新婚夫婦の話となるとすぐに、彼女たちは馬車は所有しているか、食卓にはお皿が出るか、といった話になります。その場に居合わせない婦人の名前が出ると、必ずといっていいほどその

1) オヴィディウス『愛の技巧』第1巻 159。

2) スペクテイター氏は終始フランス人を「滑稽な国民」と見ている。この見方には政治的な目的があったとは言えない。この2日前に出された『イグザミナー』32号において、スウィフトはフランス人のことを「その才能は歌と踊りとおしゃべり、つまり、虚栄とでしゃばりに振り向けられている。彼らは流行と身のこなしを重視する。彼らの本質は一般的にとっても皮相的である。彼らはたいてい些細な事に真剣に取り組み、重大なことは軽んじる」国民だと述べている。

婦人のガウンとかペチコートのお話になります。舞踏会は話をする絶好の機会ですし、誕生日はその後1年間の話題を提供する事になります。縁飾りの宝石、ダイヤモンドでボタン留めをした帽子そして紋織物の胴着やペチコートはおきまりの話題となります。要するに、彼女たちは外観だけを重んじ、人物そのものを傑出させ他人にとって役立つ存在にさせる心の飾りには思いを馳せないのです。女性たちがこのように絶えず互いの心を眩惑させ、頭は外見のことで一杯になっているときには、人生における堅実で本質的な祝福よりも皮相的な部分に対して気を配るのは何ら不思議なことではありません。このような会話で教育を受けて来た娘は当然のようにコートはすべて刺繍入りのものを着用する危険性があります。房飾りの付いた手袋は彼女の破滅につながるかも知れません。要するに、レースとりボン、金糸銀糸の縁飾りそして同じようにきらびやかな安ピカ物が頭の程度が低く教育程度の低い女性を魅了するものとなります。そして人為的に誇示される場合は、最も放縦なそぞろ歩きから非常に浅薄な男たらしを引き出すことが出来ます。

真の幸福は遠慮がちなものであり、虚飾と喧騒の敵です。そもそも真の幸福というものは自己の喜びから、そして次に選ばれた仲間との友情と会話から生まれます。真の幸福は人目に付かないところと孤独を愛し、当然木立ちや泉、野原や牧草地に出没します。簡単に言うと、真の幸福は内で欲するあらゆることを感知し、証人や観察者を数多く必要としません。それに反して、偽りの幸福は人に囲まれ、世間の目を引くのが好きです。偽りの幸福は自らの称賛からは如何なる満足感も受けません。また他人への称賛からも満足感が得られません。これは宮廷や宮殿、劇場や集いで活躍し、かつ人から見られない場合には存在しません。

オーリーリアはとても地位の高い女性なのですが、地方でのひっそりとした生活を楽しみます。そして一日の大半は散歩したり、庭いじりをして過ごします。彼女の夫は彼女の孤独の親友であり仲間ですが、彼女と知り合ってからずっと愛し合っています。二人は共に良識に富み、申し分のない美德の持主で互いに相手を尊敬しています。そして二人は互いに絶えず楽しみを与え合う存在となっています。二人の家は均整のとれた財政状態であり、礼拝、食事、仕事、気晴らしの時間は規則的です。家の内部がひとつの小さな国家のように見えます。二人はしばしばお互いにより大きな喜びを持って帰って来ることが出来る集いに出掛けて行きます。時には町にも住みます。しかしうんざりするほど長くは住みません。町に住むことで地方での生活の趣きを蘇生させるのです。こうすることによって、彼らは子供たちから愛され、召使たちから崇拜され、お互いに幸せなのです。そして彼らは知人たち全員から羨まれているというか喜びの対象と見做されているのです。

ファルヴィア³⁾の生活はオーリーリアの生活と何と掛け離れていることでしょう。彼女は夫を自分の執事と考え、思慮深さと家事を上流の婦人には相応しくない取るに足らぬ家庭的な美德と見做すのです。彼女は家の中に居るのでは人生が台無しになっていると考え、環状道路⁴⁾や劇場

3) マーク・アントニーの妻ファルヴィアについて、プルタルコスが彼女は「糸つむぎや家事をするために生まれた女性ではない」と述べている。

あるいは客間にいない限り、自分は世間から見放されていると考えます。彼女は絶えず体を動かし、不安な思いに包まれて生活しており、別の場所ではもっと交際相手がいるのだと考えて、一ヶ所でじっとしていること決してありません。オペラの初日を見逃すことは彼女にとっては子供の死よりも苦しいことでしょう。彼女にとっては女性の大切な美德はすべて哀れみの対象であり、慎重で控え目で遠慮がちな生活を送る婦人はことごとく意気のない洗練されていない女性だと彼女は言います。見られるようにしていることは単に自分を曝け出していることであり、目立つことで卑しむべき存在になっているのだと知れば、ファルヴィアにとっては大きな屈辱となることでしょう。

本紙の結びとして、衣服と誇示に対する女性の情熱についてはウェルギリウスがカミーラという人物を借りて見事に触れているのだと述べておきます。カミーラは女性の持つその他の弱点はすべて振り払っているように見えるのですが、この点だけは払拭出来ていない女性として描かれています。ウェルギリウスによれば、彼女は敵方の大殺戮後に、不幸にして、見事な紫色の外套を羽織り、刺繍入りのチュニカ（胴着）と美しい鎖かたびらを身につけたあるトロイア人が目に留まりました。「金色の弓が彼の肩に吊るされ、衣服には金色の留め金、頭は同じように光り輝く金属製の兜をかぶっていた」とウェルギリウスは描写しています。カミーラは直ちにこの立派な身繕いをした戦士を選び出しました。彼女は彼が自らを飾り立てている奇麗な衣装に対する女性特有の憧れに取りつかれたのです。

結局は進軍中の不注意な戦利品や略奪品の光り輝くものへの女性の憧れが（アイネーイス）⁵⁾

ウェルギリウスはこういったつまらない光り物を無思慮に追求したことがこのカミーラの破滅に繋がったのだという密かな教訓としてこう描写したわけです。

4) ハイド・パークの環状道路のこと。天気の良い日には、乗馬や散歩の格好の場所となった。

5) 『アイネーイス』第2巻 781-2。